

特集テーマの設定について

平 正 人

文教大学教育学部教授（同教育研究所所長）

Introduction to Feature Articles

TAIRA MASATO

(Director-General, Institute of Educational Research, Bunkyo University)

紀要第27号では、依頼論文5篇、研究論文6篇、実践研究と実践報告が各1篇、計13篇の成果を収録することができた。ご執筆いただいた皆さまにはこの場を借りてお礼を申し上げます。

今年度は「主体的・対話的で深い学びをめざす教科用図書・教材の活用」を特集テーマに設定した。教科用図書は一般的に「教科書」と称されている。日本の学校教育においては教育課程の構成に応じた教科の主たる教材として位置づけられ、明治初期の学校教育制度の開始以降、現在に至るまで、児童生徒が学習成果を修得するうえで重要な役割を果たしている。また、各学校の学習指導では「教科書を使用すること」が義務づけられており、それによって教育の機会均等を実質的に保障し、全国的な教育水準の維持向上が目指されている。その一方で、近年、補助教材として「デジタル教科書(教材)」等の活用が進みつつある。学校教育が次期学習指導要領の示す「主体的・対話的で深い学び」を通じた学習活動にスタイルを転換させるなか、児童生徒の「学び」のさらなる充実をはかり、知識の活用および探究型学力の向上をねらいとする学習指導を実施するためには、教科書や補助教材の活用法をいま一度問い直す時期を迎えているのではなかろうか。

以上のような特集テーマのもとに、今号に収録した論文は次の通りである。「『主体的・対話的で深い学び』に通底する明治・大正期教育実践の分析—宮城県の事例を中心に—」をはじめとして、「新学習指導要領のける高等学校用生物教科書への提案」「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進」に関わることができる教科書のあり方を探る—自分自身の授業を対象化し、教科書と授業づくりとの関わりを考えることを通して—」「思考の活性化をさせる授業：外国語活動・外国語科の教材をどう扱うのか」「ネットいじめ防止に関する主体的・対話的で深い学びの実践～暗転型の情報モラル教育からの転換を求めて～」。これらの論考では教科書および補助教材の意義や内容の歴史の変遷、児童生徒の学習活動を促進する活用法の最前線など、さまざまな立場・視点から多角的かつ実証的な考察が繰り返されている。是非この機会にご一読いただくことを切に願うばかりである。